

式辞

鈴鹿工業高等専門学校を卒業、修了される皆さん、おめでとうございます。今年度、準学士課程卒業生はモンゴルとインドネシアからの留学生各 1 名を含む 191 名で、専攻科修了生は 29 名です。教職員を代表してお祝いを申し上げますと共に、これまで長きにわたりご支援を賜りました保護者を始めとする関係の皆様は厚く御礼を申し上げます。

皆さんは中学を卒業した早い段階で技術者を目指し、難関の試験に合格して鈴鹿高専に入学されました。高専生活では躓きや悩みもあったと思います。とりわけコロナ禍は大変だったでしょう。しかし皆さんは不自由な中、様々な活動で大活躍されました。例えば昨年度、二年間のブランクで引き継ぎがなかった高専祭を再開して大成功に導いたのは、仲間と協力して物事を成し遂げる皆さんの真骨頂でした。今年度のフィナーレを飾ったメモリーズのパフォーマンスは一生忘れることが出来ない思い出になったことでしょう。

また、入学当初は卒業までの道のりが長いトンネルのように思えたでしょうが、今、皆さんの前には各々の景色が明るく広がって見え始めている筈です。その景色に幾分か不安があるかも知れませんが、自信をもって大丈夫です。皆さんは鈴鹿高専での学習や様々な活動を通して入学時とは比較できない程成長されています。社会に出れば同年代の技術者と比べて圧倒的な実践力が身につけていることを実感される筈です。特に専攻科修了生は研究面でもそれを自覚されるでしょう。

そこで、技術者として旅発つ皆さんに期待を込めて二つの事をお話しします。それは我が国の技術開発の変化と、直面している課題です。

先ず技術開発の変化ですが、戦後の日本は自動車や電化製品など欧米が発明した革新的な技術を輸入して、その技術を高度化すること、そして大量生産することで急速な経済成長を遂げました。これには高専卒業生の貢献も高く評価されています。しかし今日の技術開発では、既存の技術を高度化することよりも、社会の課題を発見してそれを解決すること、具体的には IoT を始めとする様々な技術を融合して新しい価値を創造する技術開発、つまり複合融合技術が主流になりました。人間社会を一変させた iPhone の出現が典型例と言われています。そもそも世の中の課題や問題は理系や文系という区分にさえも分かれておらず極めて学際的です。これが今日、技術者にも多様性、ダイバーシティが重要と言われる理由の一つで、皆さんはこれから多様な専門の人々と協働して目的を達成することの重要性を身に沁みて実感される筈です。その時、高専で得意だったことは自信を持って活かして下さい。不得意だったことは学び直せば良いし、得意な人の力を借りることもできるでしょう。

次に我が国が直面している課題をお話しします。それは 1990 年代から 30 年間日本の産業や経済が低迷し続けている「失われた 30 年」の問題です。戦後、世界の奇跡と言われた高度経済成長を成し遂げた日本が、今、何故失速しているのでしょうか。イノベーションが日本で起きていない理由について武庫川女子大の岸本義之先生の分析を紹介しましょう。

岸本先生は、欧米を手本にして「追いつき、追い越せ」の時代が終わった後、学力が高く本来エリートと呼ばれる人達が過去の成功パターンを手本にする「前例踏襲主義」に陥ってしまったから、と述べています。そして前例を踏襲する文化の中で今の中高年の多くは変化する能力を培う機会がなかったとも厳しく言及しています。迷ったときは変化すべきと言われる今日でも、現状維持を選

押しがちなのは何故でしょうか。それは変化して可能性を追求するよりも、リスクや懸念事項を並べ連ねる方が容易で心理的納得感が大きいからと分析されています。

このように、日本でイノベーションが起きない理由は相当根深いところにありますが、岸本先生は希望的な見解として次のように述べています。「日本の将来を悲観することはない。何故ならば若い世代はまだその悪い癖に染まっていないから」そして「やる気のある若者は前例に囚われることなく、社会の課題を解決する技術やビジネスモデルの革新を進めていこう」と結んでいます。若い世代とは皆さんのことです。

実験や実習も重視する実践的教育と評価されてきた高専も、これからはイノベーションを生む次世代の実践的教育のために更に変わる必要があります。今から十年前、高専制度創設五十周年の時に高専機構の理事が全国の高専に向けた言葉を私は今も覚えています。理事はバスケットボールの人気漫画スラムダンクを引用し、試合の前半戦をよく戦った選手達に安西監督が言ったセリフを高専の状況に当てはめて次のように言い換えました。「高専はこれまでの五十年間よくやってきた。しかしそれは忘れて下さい。今後の五十年は大きく変化しなくてはなりません。」という言葉です。高専の関係者はこの言葉を今、改めて噛み締めるべきでしょう。

今高専はより高度な実践的技術者を育成するために変化することを国から期待されています。例えば文部科学省は高専にイノベーション教育を期待して大きな予算をつけました。その予算で鈴鹿高専もスタートアップ教育の環境を整備していることは皆さんもご存じでしょう。皆さんはこれから様々な分野で夫々の目標に向かって活躍されますが、皆さんの中からもイノベーションを生む人達が出てくることを期待します。

最後に私の個人的な話になりますが、私はこの三月に校長の定年の年齢を迎え、皆さんと一緒に鈴鹿高専を卒業します。校長として最後に勤めた鈴鹿高専の四年間は私の人生の宝です。皆さんと共に過し、触れ合えたことは忘れ得ぬかけがえのない思い出です。鈴鹿高専を離れても、卒業される皆さんの活躍と鈴鹿高専の発展を心から願うことをお伝えし、式辞とします。

令和六年三月十五日

鈴鹿工業高等専門学校長
竹茂 求